

宇部市SDGs未来共創企業 インタビューシート

2024年7月提出

基本情報

 ethical bamboo	企業(団体)名	エシカルバンブー株式会社		
	代表者名	代表取締役社長 田澤 恵津子	業態	法人
	業 種	E: 製造業	従業員数	21人
	所在地	〒747-0104 山口県防府市真尾12-1(※本社) 〒754-1311 山口県宇部市小野下小野3909の1(※繊維工場)		

積極的に取り組んでいる開発目標



インタビュー項目

①普段どのようなことをされている企業(団体)ですか？

竹の洗剤、竹のアウトドアスプレー、竹の箸、竹のタオル等の商品企画・製造・販売を行う企業です。竹と共に竹を活かし人と共に人と生きる“エシカルバンブー”という看板を掲げて「人・自然・生物・地域それぞれを尊重した、誰も何も傷つけない、竹を活かしたエシカルなものづくり」を大切にしています。

2020年には宇部市と連携協定を行い廃校になった中学校の校舎を有効利用して「竹で地域を元気にする」をコンセプトに竹の生態系や歴史、利活用方法について学べる竹の総合施設「竹ラボ」を運営しています。



②SDGsに取り組むに至ったきっかけ、理由は？

弊社代表の田澤は20年程前に東京でコンサルタント契約を結んだ大手電力会社から「放置竹林の竹が、送電線に絡むので困っている」と相談を受け、竹の有効利用の道が開けることが放置竹林問題解決の糸口と考えました。さらに成長が早く消臭性や抗菌性にも優れている竹は繊維の材料として優れていることに気づき、クライアントと一緒に竹繊維でタオルを作るプロジェクトを立ち上げました。竹の活用方法として毎日使う日用品を環境に負荷をかけることなく商品化をすることを目指したからです。

そのタオルを使ってくれたお客様たちから「このタオルを安心して洗濯できる安全な洗剤もほしい」という声が届きました。そこで環境に負荷をかけず体にも無害な洗剤を調査した結果、山口県防府市の竹洗剤の製造会社に出会いました。しかし、その会社はメンバーが高齢の為後継者問題に悩んでいました。

田澤は「日本の竹を使ってモノをつくる」という事業をきちんと後世に残すべきだと思いその事業を継承する決心をしました。そこから始まった会社がエシカルバンブーです。



③普段どのようなことに重点的に、或いは意識してSDGsに取り組んでいますか？

竹は原材料から製造工程も含めて環境に一切負荷をかけないうえ継続的に管理することで半永久的に使える究極にサステナブルな資源なので製造時に工場内で一切の化学薬品を使用していません。さらに工場から本来出るはずの廃液・排熱・排水・排気などを全て商品化に活かすことで環境に負荷をかけない環境循環型製造工場を実現しています。

2023年には、田澤が中心となり竹の伐採・供給、加工・製造・販売者等が連携して竹資源の有効活用を進める竹利活用プラットフォーム「YAMAGUCHI Bamboo Mission」を行政・地域・民間の3者共同で設立しました。放置竹林問題などでマイナス面が目立つ竹を有益な資源として活かし、地域社会と連携しながら国産竹の付加価値を上げ持続的な竹の利活用促進につなげる取り組みを積極的に行っています。

またSDGsの目標である「誰一人取り残さない」持続可能な多様性のある社会を実現するため、誰もが働きやすい仕組みづくりに取り組んでいます。たとえば高齢者や主婦、若年層ひきこもり人材や障害者人材の雇用の創出など、社会復帰促進センターと連携して様々な人材が活躍できる場を創出しています。



④2030年に向けたSDGsの取組について、今後の予定を教えてください。

私たちが目指す2030年のビジョンは、竹の利活用によるサステナブルな社会の実現です。

前出の「YAMAGUCHI Bamboo Mission」を積極的に推し進め、竹害問題などでマイナス面が目立つ竹を有益な資源として活かし環境循環型竹産業の創出に挑戦していきたいと考えています。具体的なアイディアは「国産竹のブランド化」「各地域の特徴を活かした竹製品づくり」「新たな竹産業の構築」など枚挙にいとまがありません。これらの施策で循環型産業を創造するための事業を行い、地域社会と連携しながら国産竹の付加価値を上げることで持続的な竹の利活用促進につなげます。

自然環境を未来へつなげ残していくことは、ものを作るために山に入るのではなく山や森を整備し守ることを目的に山の恵を地域資源として有効活用することと考えます。弊社はその地域資源の特色を活かしたエシカルなものづくりを積極的に推進していきます。

